ソウル　マインド
『魂から心へ　心理学の誕生』
エドワード･S･リード／村田純一，染谷昌義，鈴木貴之訳
青土社

本　　館	請求記号：K/140/R23	資料ID：106886013
Knowledge Base	請求記号：/140/R23	資料ID：111504023

人間科学部教授　大久保 街亜

1年生や一般教養の授業で、講義を受ける前に持っていた心理学のイメージを受講生にたずねることがある。回答として「他人の心を読む学問」というものが多い。SNSや動画サイトで目にする「メンタリスト」が心理学者の典型のようだ（なお、これは完全な間違いである）。

そんなイメージを抱き心理学の講義を受講すると、学生は面食らうだろう。まるで違うからだ。心理学は、「個人の行動とその心的過程の科学的研究」である。データに基づいた地味な実証科学である。他人の心を読んだり、行動を言い当てたりと、手品のようなことはしない。だから授業でも取り上げない。むしろ、科学とは何か、心の測定とは何かと、理科系学問を煮しめたような話をされる。一体、これのどこが心に関係するのか？受講生は期待外れで嫌気がさしてしまう。

なぜ、ここまで期待と違っているのか？その答えの一端がこの書籍には書かれている。心理学は19世紀の末、哲学から別れ、心を科学的に検討する学問として始まった。そのような始まりには、当時の時代背景が関係する。政治や地理的状況も含め、科学や実証性を重視する空気があった。その時代背景を本書は、丁寧にかつ重たく教えてくれる。簡単な書籍ではない。前提知識も必要である。それでも、心理学が如何にして生まれてきたのか、この本を通じて知ることができる。自分の学ぶ学問の足元を知るためにもぜひ手に取ってほしい。